



TITLE:

# 社会的文脈における土壌・生態環境 (特集 地域研究の新地平)

AUTHOR(S):

荒木, 茂

---

CITATION:

荒木, 茂. 社会的文脈における土壌・生態環境 (特集 地域研究の新地平).  
アジア・アフリカ地域研究 2001, 1: 54-67

ISSUE DATE:

2001-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/79980>

RIGHT:

特集・地域研究の新地平

社会的文脈における土壌・生態環境

荒 木 茂\*

Environment and Soils in Sociological Context

ARAKI Shigeru\*

Ecological area studies should focus on elucidating the dynamic relationships between environment and society, rather than describing human activities of a certain area on the basis of conventional knowledge of the environment, or conducting ecological studies within the framework of academic disciplines. A study of permanent banana gardens in the west of Lake Victoria, Tanzania, revealed that the land-use is controlled by both environmental settings and customary land tenure systems, thereby creating rather tight landscape in terms of utilization.

1. は じ め に

地域の営みや成り立ちを、生態環境、あるいは物質を介した自然と人との交渉という視点からみていくことは、地域研究の重要な一分野である（生態重視の地域研究）。地域を、物質レベルでの生の営みの連鎖としてとらえ、そこに新しい視点をみいだしていくことは、地域研究の大きな魅力のひとつである。既存の学問分野では決して正面から論じられることのなかった「地域」を、より包括的な世界理論や、一般的な科学的概念に収束させるのではなく、その内部にある事象自身によって語らせることは、さまざまな既存の枠組みが崩壊してきている現代において、未来を切り開く積極的な意義をもっているといえよう。

地域における諸事象の関わり合いは千差万別であるから、決まった方法論や地域の見方というものは存在しないのかもしれない。しかし、「地域を理解するということはどういうことなのか」という共通の問題意識をもつことによって、バックグラウンドの異なる地域研究者間の相互交流をはかり、地域研究の個別化、細分化をさけることは必要であろう。

本稿で述べようとするのは、自然科学的な生態認識を手がかりとして、それをどのように

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

地域システムの中に位置づけ、地域の文脈の中で理解していったらよいのかのひとりの試みである。

## 2. 自然と人間のシステム

### 2.1 生態重視の地域研究とは？

東南アジア、アフリカ研究者をひきつけてきたものは、熱帯の、時には過酷ないきいきとした生態と人々の生活であった。異国の環境と人々の生活が渾然一体となって訴えかけてくるエネルギーの総体を、その中に身をおいて明らかにすることは、地域研究者にとっての大きな魅力であった。気候によってはぐくまれた人々の生活、その心象としての「風土性」の理解が地域研究の出発点といってよいだろう。しかし、その先に何がくるのであろうか。

一例として図1に熱帯アフリカの在来農業システムと主な栽培作物の分布を示した。この図

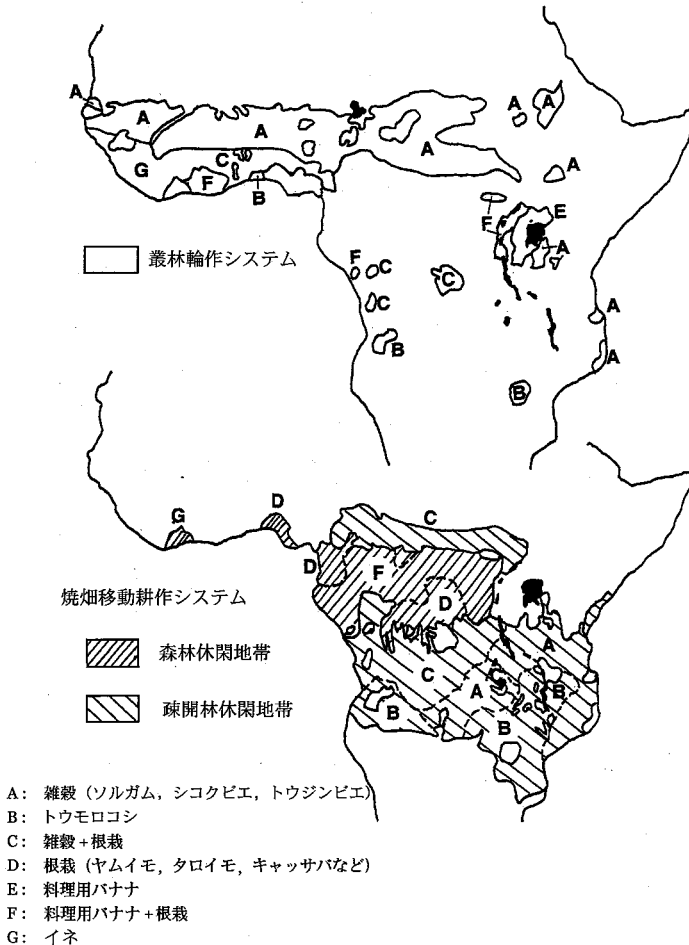


図1 熱帯アフリカの在来農業システムと主な栽培作物（Morgan [1969] より作図）

の示すところは、年間湿潤な熱帯多雨林帯では、森林休閑による焼畑移動耕作によって、バナナとキャッサバ、タロ、ヤムなどの根裁類が栽培され、乾季、雨季の交替するサバンナ帯では、雑穀、トウモロコシを主体とする疎開林休閑システム、乾季の優勢な半乾燥地帯あるいは草原、叢林では、雑穀、トウモロコシの叢林輪作システムがみられるということである。湿潤から乾燥に向かうにつれて、多年生作物（バナナ、根裁類）から一年生作物（穀物）への傾斜がみられること、原植生が破壊され叢林の割合が大きくなると、休閑システムから輪作システムに移行する傾向を示している。生態環境が作物の種類、人々の生活を大きく規定していることは明白である。しかし、知識としては常識的、中学校のレベルである。このような枠組みを前提として、人々の自然との関わりあい、社会の成り立ちや動態を研究することが生態的な地域研究の大きなテーマのひとつであった。しかし、ここでは生態環境がいわゆる所与のもの、あるいは出発点として仮定されているにすぎないのであって、ベクトルは明らかに社会にむかっている。このようなものが、生態重視の地域研究といえるだろうか。

生態と地域研究を融合させるためには、まず所与のものを疑うことから始めなければならないと思う。いわゆる「なぜ」である。ある地域の農業システムは、生態環境、農業技術、社会・文化が密接に融合したところで成り立っているから、簡単にはときほぐせないことが多いだろう。しかし、ある農耕技術や作付体系が定着するに至った経緯については、特定の生態環境のもとで、農民の実践を通じて取捨選択されてきたものだからそれなりの理由があるはずである。具体例を示すと、なぜビクトリア北—西岸地帯には、熱帯サバンナ気候にもかかわらず永年作物であるバナナの集約的栽培がおこなわれているのか。なぜザンビア北部地帯のみにチテメネという焼畑栽培がみられるのか。なぜナミビアからアンゴラ、ザンビア西部のカラハリサンド地帯にトウジンビエ栽培が普及しているのか、などである。地域の農業システム（景観）は、気候、植生、水分環境、土壌、地形、民族、文化のまたとない結合から成り立っているわけだから、一般的な方法論は適用できない。しかし現場で「どのように」それがおこなわれているかを観察し、農業システムをつくる上記の構成要素に分析を加えることによって仮説的な答えを導き出すことが可能であろう。

一方、これでは生態的基盤の研究、いわば「地域で」生態的研究をするのであってディシプリン研究にすぎないという人もあるだろう。また、このようにして得られた知見は、現場では自明な知識の科学的なあとづけにすぎないと。しかし、もしこのような仮説を導き出すことができれば、かなり本質的なところで地域の動態が把握できたといつてよいのではないだろうか。たしかに枠組みは科学、かもしれない。しかしその運用は特殊で、答えも特殊解。このような枠組みを設定できないとすると、地域研究における「理解」とはそもそも何であろうか。

## 2.2 社会システム

生態環境とは自然物である。これをどのように利用するかは地域社会の運用システムによっ

ている。タイトか、ルーズかの差こそあれ、運用システムの見られない地域はない。運用システムは生態環境に強く影響されるが、また生態環境、景観を変えていく。身近な例でいうと、アフリカの景観の多くは完全にヨーロッパ型であるといえよう。土着の森林を切り払ったあと、ユーカリ、マツなどの植林が畑のところどころになされ、その間に教会の尖塔や学校が見え隠れする。これも文化である。しかし、ここで述べたいのは、土地制度、土地所有の問題である。在来農業システムは、資源利用という面で生態環境に強く依存する側面をもつが、制度の中に生きる人々の多様な生き方によって、生態環境にさまざまな働きかけをしているということである。地域とは制度を媒介とした、利害を異にする人々と生態環境とのダイナミックな交渉の場であり、制度の変革を含んだ「地域変動」の要因を内包しているものとみなすことができよう。もちろん、地域外との交流も見逃せない。生態重視の地域研究においては、このような文脈のなかで、物質レベルから社会システムに至るまでの連鎖の諸段階を、定量的に押さえていくことが必要なのではないだろうか。

人文系の人々には半ば常識と思われるようなことをくくだ述べたのは、私がザンビアにおけるベンバの焼畑（チテメネ）の生態学的研究からアフリカ研究を始めた事情によっている。ここでは徹底的な焼畑によって、過酷な生態環境を克服していることに強い衝撃を受けた[荒木 1996]。一方、土地所有に関しては、チーフの領地を合議によってなかば自由に使うといったもので、焼畑は共有地でおこなわれていた。生態から見る限り、土地を社会的にコントロールするシステムはないように思えたのだ。しかし、ベンバはその領地に数々の周辺社会を従えた強い王国であり、チーフが土地の権限をもっているということの意味については思いが及ばなかった。チーフの領地である、ということが実は焼畑と疎開林の存続を成り立たせている大きな要因であって、国有地になっているところでは、入植プロジェクトが実施されて土地利用が大きく変化してきているところもある。また現在、ベンバランドでは80年代にトウモロコシの半常畑栽培が普及したあと、90年代はじめからの自由化政策への転換によってトウモロコシ栽培が成り立たなくなり、かえって在来性への依存を強めている[大山 1999]。焼畑の将来についても、土地の私有化などの社会システムによる土地の運用の面が大きく影響をあたえてくることが予想される。

このように、生態環境に対する社会システムの関与を意識するようになったのは、タンザニア・ビクトリア湖西岸で、ハヤの人々によるバナナ栽培システムにふれる機会をもってからである。ここでは、人々は永年バナナ栽培がおこなわれている屋敷畑（キバンジャと呼ばれる）に強い執着をもっており、子孫に十分なキバンジャを残すことが最重要課題となっている。土地の売買、相続によって生じた、土地を持てる人と持たざる人の差が、バナナ園の経営自体にも大きな影響を及ぼしていた。次節でその点について述べてみたい。

### 3. タンザニア・ハヤの事例

#### 3.1 生態環境

ハヤの人々は、タンザニアの北西端、ビクトリア湖西岸に広がるカゲラ州を主たる居住地にしている（ブハヤ）。気候は4月と11月に2つの降水のピークをもつ熱帯サバンナ性の気候（年平均気温は20℃、年較差は10℃）であるが、降水のない月はない。年平均降水量は湖岸のブコバで2,400ミリであるが、西に向かって急速に減少し、湖岸から40キロメートル離れると1,000ミリになる。この地域の地形・地質は、先カンブリア紀の石英砂岩、粘板岩の互層が、南北を軸に西側にゆるく傾き、侵食に抵抗性のある石英砂岩を頭にしたテーブルマウンテン状の台地と、それをとりまくエスカープメント、低地からなる（写真1）。標高は1,100メートルから1,600メートルの範囲にわたっている。バナナ栽培は、この多雨地帯に集中しており、雨量が1,200ミリ以下になるとバナナ栽培はほとんど見られなくなる。熱帯多雨林地帯以外で、かつ土壌の肥沃な地帯をのぞいて、永続的なバナナ栽培がおこなわれているのはきわめて特異であり、その成立に関与する自然条件、農業システムについては古くから農学者の関心をあつめていた [Allan 1965]。

#### 3.2 ハヤの歴史と農業システム、土地利用および制度

ハヤの歴史は15世紀にさかのぼる。ビクトリア湖西岸地域には、雑穀を栽培するバンツ系農耕民ニャンボが移動耕作を営んでいたが、現在のウガンダ南部に位置するアンコーレ王国からナイロ・ハム系牧畜民ヒマが南下し、この地にカラグウェ王国を設立した [Cory and Hartnoll 1971; Davidson 1967]。その後、王家のクラン（ヒンダ）の息子たちが周辺地域を支配し、数々の王国を建設した。19世紀の植民地分割期には現在のカゲラ州の地域に8つの王国が存在した。このようにハヤはバンツ系とナイロ・ハム系との混血によってできた民族である。バナナは、ビクトリア湖の北岸地域では少なくとも14世紀にその栽培が認められるので [Ehret 1984]、ブハヤにもそれ以降浸透したと考えられる。それが、永続的かつ集約的なバナ

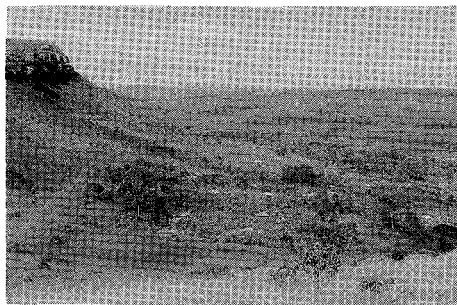


写真1 砂岩台地の間にひろがるバナナ園（キバンジャ）

ナ園として定着したのは、ひとえに牧畜民ヒンダがニャンボを農奴として支配することによって、ヒンダのつれてきた牛とその糞が農耕と結びついたからである [Tibazarwa 1994].

バナナ園はキバンジャとよばれ、家屋敷を中心に平均1ヘクタールほどの広さをもつ、いわゆる屋敷畑である。キバンジャは独立して存在することはほとんどなく、密集して集落を形成している(図2)。屋敷の裏にはトイレがあり、また牛舎、先祖の墓もキバンジャ内に設けられる。生ごみ、家の床に敷いた草など家庭ゴミのすべてがキバンジャに還元されるので、余分なものをいっさい系外にもち出さない体制が確立している。キバンジャはまた、数々の一年生作物が共存する混作畑である。頻度の順番で示すと、インゲンマメ、トウモロコシ、タロとココヤム、ヤムイモ、ナス、トマトのほか、多年生であるキャッサバ、ヒマ、コーヒーなどがみられる。コーヒー栽培の歴史は古く、エチオピアから伝わったとされるロブスタ種が伝統的に利用されていた。しかし、ドイツ植民地期にアラビカ種が導入され、商品作物としてキバンジャに強制的に導入された [Tibazarwa 1994].

キバンジャの外側には、ルウェヤとよばれる草地在広がっている。ここは牛の放牧、屋根、敷草などのための採草地として利用されてきたが(伝統的ハヤの家は立派な構えをもつ草の家である)、キバンジャの近くのルウェヤでは、シコクビエ、ソルガム、バンバラマメ、キャッサバなどの栽培がキバンジャを補完するかたちでおこなわれてきた。ハヤの人々は厩肥の投入によりキバンジャを広げる努力を永代にわたって続けてきた。現在みられるキバンジャとルウェヤの分布はその結果であり、古老の話によると、その境界は1センチたりとも広げることのできない運命的なものである、という。また、村人がたどることのできる数世代前から境界は変化していない。キバンジャの立地条件とはどのようなものであるのだろうか。現在は失われてしまったが、キバンジャの原植生は山地林であったといわれている。山地林が成立するためには、水分条件にめぐまれていなければならないが、ルウェヤの中に点在する凹地、あるいは土層が厚いという条件であるのかもしれない。実際、ルウェヤになっているところは、石英砂岩層が地表近くに露出しているところが多く、粘板岩が残って土層の厚い部分にキバンジャが多い傾向にはあるようである。このようにキバンジャとは、自然と人為の境界に生じた人工景観であり、その動態は両者のバランスに支配されている。

ハヤは身分制社会であった。王家のヒンダクランを中心として、ヒンダ系クラン、農耕民クランが存在し、夫役、献納をととした支配—従属関係があった。王家は、ニャルバンジャとよばれるキバンジャを所有しており、ニャルバンジャを分与された地主は、小作人にそれを貸し与え、生産物の一部を徴収した [Cory and Hartnoll 1971]. この土地はキバンジャ全体の10パーセント程度であったとされる。この制度は、タンガニイカ独立によって王制とともに廃止され、ニャルバンジャは耕作していた小作人に分配された。一夫多妻制であったハヤ社会では、妻の数だけキバンジャをもち、そこに妻の家を設けて管理させた。キバンジャの相続には明確

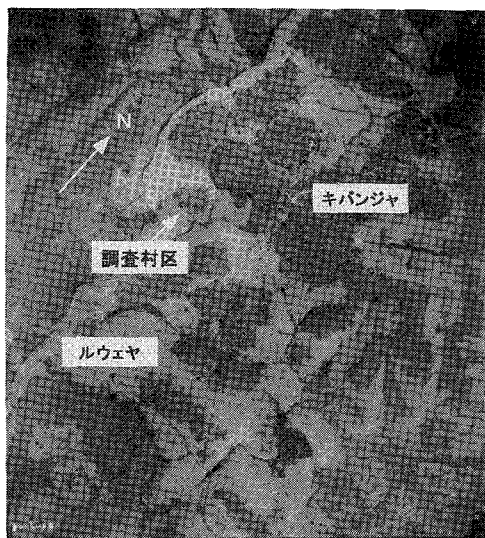


図2 キバンジャとルウェヤ分布および調査村区（カゲラ州ムレバ県カムチュム郡）

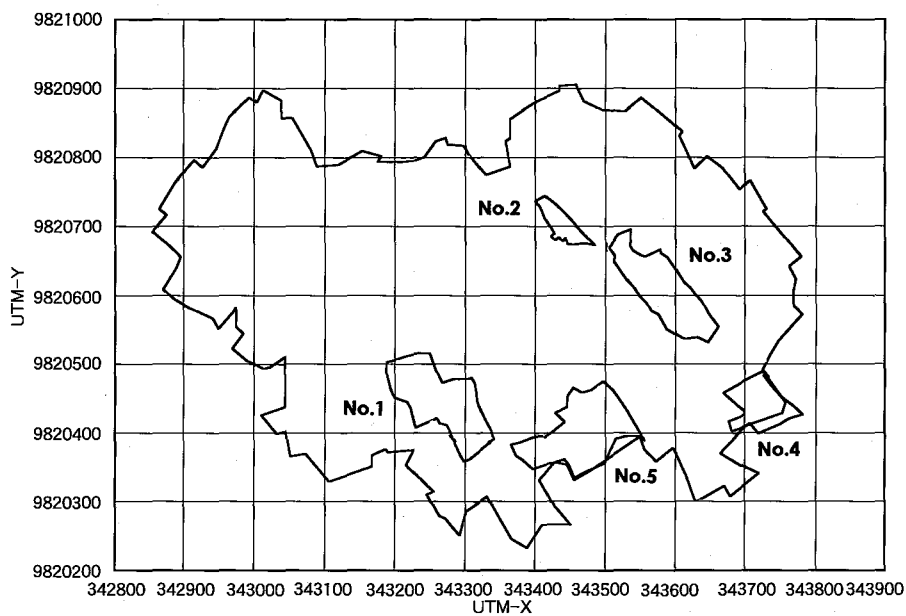


図3 調査村区の境界と測定キバンジャ

な慣習法があり、それはキバンジャをできる限り、クランの所有下におくという原則によって貫かれている。父系制のため息子がキバンジャを相続するが、複数の息子がいる場合は、独立した順にキバンジャが分与され、家長が死んだときに、そのキバンジャを末子が相続する。一方、第2次大戦後になってコーヒーや商売で儲けた金でキバンジャを購入し、あらたに地主と



なる階級も出現した [池野 1975]。このように、ハヤ社会ではいろんな形で階層分化が進んでいるとみることができる。それはハヤの主食であるバナナの生産をになうキバンジャの重要性から派生したことが想像される。時代が下るにつれてキバンジャに対する要求度が高まり、それがルーズからタイトな土地管理および景観の変容をおこさせたに違いない。

### 3.3 キバンジャの動態

以上に述べたようなハヤの生態環境と歴史をふまえたうえで、現在の土地利用と生業生態がどのようになっているのかをみてみたい。今回紹介するのは、ムレバ県カマチュム郡カマチュム地区イログロ村に属する村区Aである。図2に航空写真、図3にGPS (Global Positioning System) と歩測による村区境界と測定キバンジャの位置を示した。村区境界は、キバンジャとルウェヤの境界と同義である。航空写真は1991年に撮影されたものであるが、台地上は、キバンジャ、ルウェヤ、川筋の湿地と林でほとんどうめつくされており、遊びのないタイトな空間であることがわかる。村区Aのキバンジャ面積は、39.78ヘクタール、世帯数62、既婚100人、未婚31人、17歳以下の子供251人、総人口320人であるので、キバンジャあたりの人口密度は、804人/km<sup>2</sup>、世帯あたりのキバンジャ面積は、0.64ヘクタール/世帯、世帯あたりの子供数は4.5人となる。ルウェヤを入れた土地あたりの人口密度は半分以下になるとしても、この値はバナナの高い人口扶養力を示している (しかし詳しい解析は、ルウェヤでの耕作、コーヒーの現金収入、村外への人の移動などを考慮に入れておこなわなければならない)。測定された5つのキバンジャは、村区の中で、面積の大きいものと小さなもの、バナナの生育の良いものと悪いものという基準によって選ばれたものである。

図4に、各キバンジャにおいて北西—南東方向のトランセクト沿いに測定されたバナナの樹高 (成長点までの高さ) を示した。横軸は家屋敷からの距離を示す。バナナの樹高は、生育の良し悪しを示す指標として用いられた。調査地域には66品種のバナナが知られており [丸尾2000]、利用、食味、生育特性などがそれぞれ異なっている。この地域のバナナは、醸造用、調理用、ロースト用に大別される。醸造用バナナは、調理用バナナと異なり、貧栄養の土壌でもよい生育がみられるので、本調査では対象外とした。また、調査個体の生育ステージは、厳密な意味では異なっている。しかし、キバンジャ内のバナナは年間を通じてランダムに果実が肥大していくから、生育ステージの差は平均化されるものと考えた。調査トランセクトにおいては、各株における最大の幹を測定することによって、生育ステージによる誤差を少なくした。キバンジャNo.6は、この村区には属さないが、ルウェヤの中に例外的に設けられたキバンジャを測定したものである。

この図から、同じ畑でもバナナの樹高が大きく異なることがわかる。家屋敷の周辺では、家庭ゴミなどの投入が多いためにバナナの生育がよいことが一般的に認められている。家の周辺 (0メートル付近) ではよい生育を示すことはこの図からも読み取れる。しかし、家付近で最大

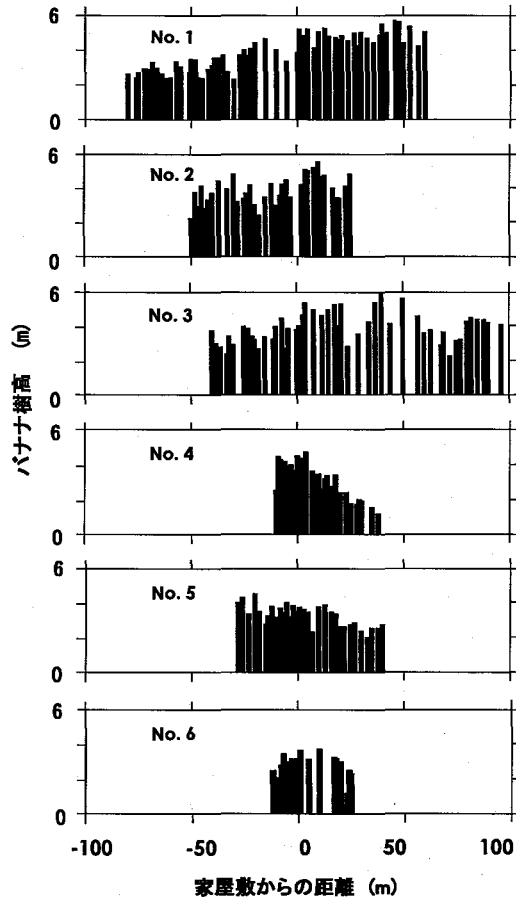


図4 キバンジャにおけるバナナ樹高の北西－南東トランセクト

樹高を示すのではなく、北西－南東方向の傾斜が認められるものが多い。顕著な例はNo.4で、これはこの畑がキバンジャとルウェヤの境界に位置しているためである。同様な傾向はNo.1、No.5でも認められる。このように周囲をルウェヤで囲まれたこの村区においては、中心から周辺に向かう土壌の肥沃性の傾斜がみられることが予想される。この村区は南東向き斜面に位置し、3から6度の傾斜をもっている。上下のルウェヤでは石英砂岩の露出がみられるので、その間にはさまれた粘板岩が風化してできた土壌の影響が強いことが推測される。各キバンジャにおけるバナナの平均樹高は、No.1からNo.6までそれぞれ、3.86、3.90、3.92、3.13、3.27、2.88メートルであった。平均樹高で最大で1メートル以上の差がNo.1からNo.6の間でみられている。No.6のルウェヤにある畑が2.88メートルと最小値を示したのは、ルウェヤの劣悪な土壌・水分環境を示しているといえよう。しかし、ほかの畑については、畑の大きさ、家族構成などからくる管理状態の影響も強く影響を与えていることが予想される。

それでは、このようなバナナの生育は土壌のどのような性質によって規定されているのだろうか。トランセクトに沿って採取した土壌の化学分析をした結果、図5に示したように、バナナの樹高は、表層土壌の酸性度、pH (KCl) と最も高い正の相関があることがわかった。土壌のpHはさまざまな化学性を総合した特性値であるが、土壌有機物含量と深い関係があった(未発表データ)。このことには、2つの要因が考えられる。ひとつは、キバンジャからルウェヤに向かうにつれて、土壌の有機物含量、pHが減少すること。ひとつは、厩肥の投入による畑の管理が土壌の有機物含量、pHを増大させていること。つまり、バナナの生育は生態環境条件と、人為的管理の双方の影響を強く受けている。

### 3.4 土地の相続と売買・マネジメント

各キバンジャの面積は、No.1からNo.6まで、それぞれ1.60, 0.43, 1.95, 1.12, 2.68, 1.11ヘクタールであった。このような面積の差は、どのような相続関係によって生じたのであろうか。また、畑の大きさは、肥沃性や管理の良し悪しと、どのような関係があるのであろうか。

面積の1番小さいNo.2の世帯の相続関係を図6に示した。楕円は、キバンジャを示す。白抜きキバンジャの位置はかつての所有者、ハッチのキバンジャの位置は現在の所有者を示す。矢印は相続による授受関係を示す。キシャンプとして示したものは、キバンジャが耕作放棄されて、ブッシュ状態になった土地を意味している。No.2は、2000年現在33歳の世帯で、98年当時子供はもっていなかった。7人兄弟の末子で、キバンジャは従兄弟から譲り受けたものである。父親はキバンジャを相続せず、6人の子供には自分で購入した4つのキバンジャを分配して与えた。インタビューにおいてはキバンジャの面積を確定することはできなかったが、キバンジャ1個という単位は、生計をやりくりできる面積としての意味はもっているものと考えられる。彼のキバンジャが小さいのは、それが先祖伝来のキバンジャを2つに分割したもので

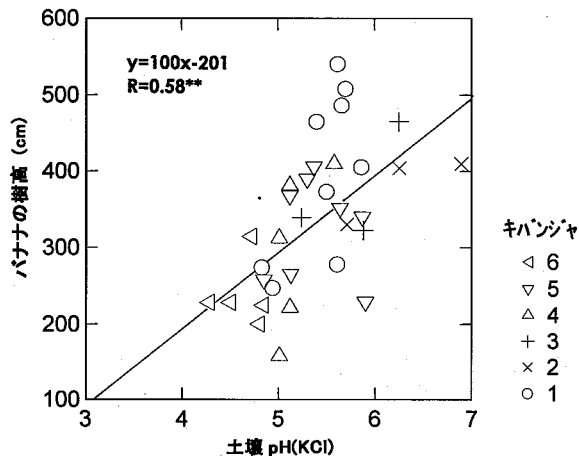


図5 バナナの樹高と土壌 pH との関係

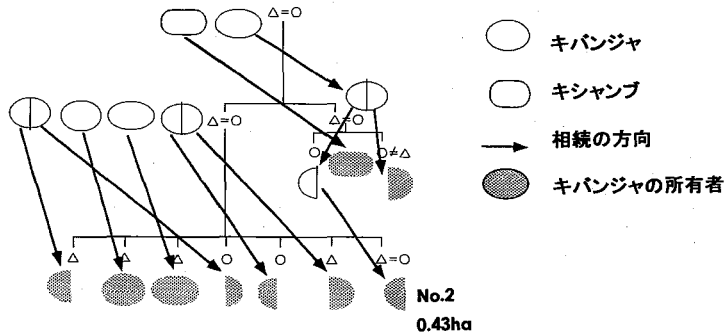


図6 No.2世帯におけるキバンジャの相続関係

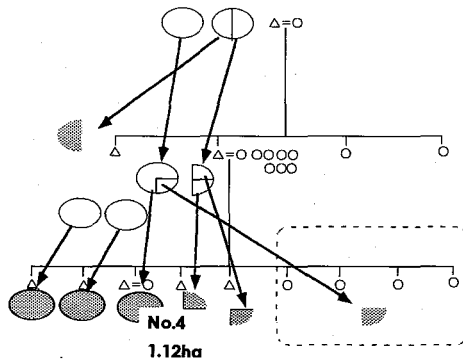


図7 No.4世帯におけるキバンジャの相続関係

あるためである。彼の父が示すごとく、子供に十分なキバンジャを残すというのは、親の務めとしてハヤの習慣の中に強く根付いている。No.2は牛をもたず、厩肥の投入もおこなっていないが、土地条件が良いためにバナナの生育もよく、現在のところ小面積ながら生計が可能な生産をおこなっていると考えられる。

2番目に面積の小さいNo.4は、33歳で2人の子供をもつ。相続関係を図7に示した。彼の父親は8人の妻と9人の子供をもっていたが、長兄2人に購入したキバンジャを与え、No.4には先祖伝来の土地の3/4を与えた。この土地はルウェヤとの境界に位置しているために生産性が低く、彼は牛をもたないためバナナの栽植密度をあげることによってバナナを確保しようとしている。

No.5は、調査小村で最大の面積をもつ66歳の世帯である。4人の妻、17人の子供をもち、長男はNo.1である。相続関係を図8に示した。彼は先代から1個半のキバンジャと1個のキチャンプを相続したが、それをキバンジャに立て直した。さらに2個のキバンジャを購入し、順次子供に分与しつつある。彼は現在5/4個のキバンジャ2.68ヘクタールをもっているが、弟であるNo.3は父親から1.95ヘクタールの土地を相続しているから、父親は4ヘクタール以上のキ

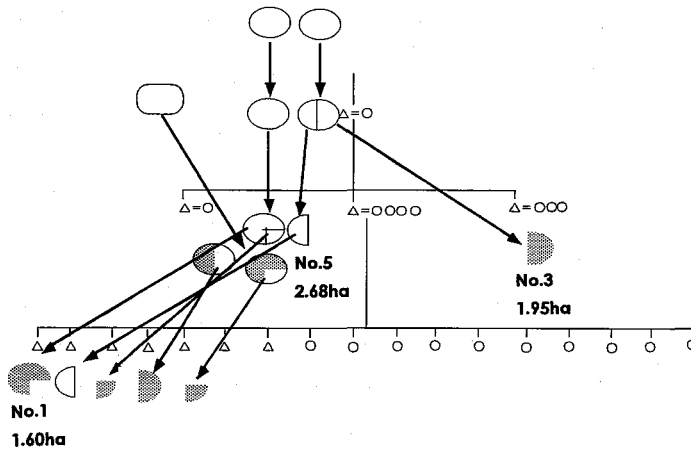


図8 No.5, No.1, No.3 世帯におけるキバンジャの相続関係

バンジャを所有していたと推測される。代を重ねるにつれてキバンジャが細分される傾向を、新たなキバンジャを購入することによって防ぐ努力が明瞭にみられる。No.5におけるバナナの生育は平均樹高が3.27メートルで決して良好ではない。しかし、コーヒーの栽植密度は、3.9本/10m<sup>2</sup>と最大であった（未発表データ）。

No.3のバナナの生育は測定キバンジャのなかで、最大の3.92メートルを示した。これは、4年前まで20頭の牛を飼養していたことによる厩肥の残効の可能性が強いと思われる。No.3は、現在64歳で3人の妻と、25人の子供をかかえている。新たな土地を購入する気配はないから、今後どのように土地を分配するつもりなのであろうか。

No.1は、現在50歳で、妻2人、子供7人の所帯である。ナイロビ大学を卒業した後、イギリスで修士号を取り、現在首都ダルエスサラームで技師として働いている。畑の管理は使用人にまかせているが、定年になったら戻ってくる予定である。所得の一部を充てて10頭の牛を所有しており、厩肥の投入によって南東部のキバンジャでのバナナの生育はすこぶる良好である。北西部は最近購入した部分でバナナの生育が悪いために、現在改良を加えつつある。

このように現在のキバンジャは、土地条件、相続規模と密接に関連してマネジメントの方法にさまざまな形がみられ、その違いが将来に対しても異なった対応を準備しつつある。

### 3.5 ハヤのダイナミズム

前節で示した世帯のなかには、1世代前（45年ほど前）にキバンジャを購入した例がいくつかみられた（No.2, No.4, No.5）。彼らはキバンジャ2個以上の購入が可能であった。この小村においてキバンジャの全面積は変化していないから、土地を売って村を出ていった人がいなくては何なるまい。1952年から56年にかけて、空前のコーヒーブームがおこり、コーヒー価格が高騰したが、それ以降急落したことが知られている [Rald and Rald 1975]。この時、人々

はかつて手にしたことのない大金を得、口にしたことのないビールを飲み明かしたと古老は語る。事実、1954年にはタンザニアで販売されたビールの半分以上がハヤの人々によって消費されたという [Tibazarwa 1994]。バブルに酔った人々は、コーヒー景気がいつまでも続くと思い、土地を担保に金をかり、それがはじけた後には、土地を処分するはめに陥った。現金経済にまつわるひとつの事件が、ハヤの階層分化を促す要因となった例といえよう。

村区におけるキバンジャの逼迫は時とともに増大しつつある。丸尾 [2000] は、キバンジャの生産性の低下、面積の減少にともない、ルウェヤでのキャッサバ耕作（畑はムシリと呼ばれる）の比重が増大している傾向を指摘し、また農耕形態の多様化が見られることを明らかにした。すなわち、比較的資金に恵まれている世帯では、キバンジャの拡大とバナナの商品化へと向かう「キバンジャ専門型」、キバンジャの面積が絶対的に少なく、バナナの生産がまかなえないために、ムシリのキャッサバ生産にたよる「ムシリ高比重型」、バナナを販売する余裕があるが、ムシリでの生産も確保する「キバンジャ—ムシリ複合型」である。これらは、階層分化を助長する動きと考えられるが、コーヒーによる現金収入、農業外所得と併せて多様なインパクトを土地にあたえつつある。

一方、本稿では述べなかったが、他の村区の中には、王家のクランに属する人々など、相続によって広大なキバンジャを所有しているが、子供たちは都市で働いているために労働力が不足し、耕作されずに放棄キバンジャ（キシンプ）をもっている世帯がある。これらは一時的な耕作地として貸し出される場合もあるが、所有権が放棄されることはない。キバンジャが不足する一方で、有効に使われないキバンジャが存在しているというのは、階層分化が見られるハヤ社会の矛盾であるが、それらが将来有効に利用される可能性も含めて、さまざまな動きを内包しているといえよう。ルウェヤはもともと国の土地であったが、私有化の傾向がみられる、というのもそのひとつである。

#### 4. お わ り に

以上、生態環境と社会は、物のレベルで密接に結びついており、その諸相をえがきだすことが地域研究の重要な一分野であることを、ハヤの事例をもちいて述べた。もうひとつ突きつめると、どんな地域においても生態環境と社会は本来的に一体なものとして存在する。ハヤ文化はまさに、生態環境と農業システム、社会システムが渾然一体となって歴史的に形成されてきたものである。それを生態環境と社会とに分けて考えるのは、分析的な手法の問題である。地域研究において地域のダイナミズムを明らかにする意義があるとすれば、有機的な地域のシステムを、その構成要素間の量的な関係から明らかにしていく必要があるだろう。

ハヤの事例が示すものは、慣習法の適用によってつくられてきた社会階層がそれぞれ異なった関係を生態環境ともちつつあり、それが新たな社会の流動化の引き金となるというダイナ

ミックな緊張をつくりだしている，ということである。また，現在の土地運用システムが続く場合，生態環境がどのくらいの潜在力を発揮するのかということや，オルタナティブにどのような土地運用システムがあるのか，という問いに将来答えるためにも，生態重視の地域研究の役割は大きいということができよう。

#### 引用文献

- Allan, W. 1965. *The African Husbandman*. Edinburgh: Oliver & Boyd.
- 荒木 茂. 1996. 「土とミオンボ林—ベンバの焼畑農耕とその変貌」 田中二郎・掛谷 誠・太田 至編著『続自然社会の人類学』アカデミア出版会, 117-143.
- Cory, H. and M. M. Hartnoll. 1971. *Customary Law of the Haya Tribre, 2<sup>nd</sup> impression*. London: Frank Cass.
- Davidson, B. 1967. *The Growth of African Civilization, East and Central Africa to the Late Nineteenth Century*. Essex: Longman.
- Ehret, C. 1984. Between the Coast and the Great Lakes. In Niane, D. T. ed., *General History of Africa IV*. Heinemann: Heinemann Educational Books, pp. 481-497.
- 池野 旬. 1975. 「タンザニア・ハヤ族の土地保有制度—ニャルバンジャ制度とスコッター制度—」『アジア経済』XX-12:77-89.
- Morgan, W. B. 1969. *Peasant Agriculture in Tropical Africa*. London: Methuen & Co ltd.
- 丸尾 聡. 2000. 「タンザニア北西部における集約型農耕の多様化—ハヤの草地利用をめぐる—」京都大学大学院人間・環境学研究科博士予備論文.
- 大山修一. 1999. 「市場経済化にともなう焼畑農耕社会の変容をめぐる生態人類学的研究—ベンバ社会の事例—」京都大学大学院人間・環境学研究科博士論文.
- Rald, J. and K. Rald. 1975. *Rural Organization in Bukoba District, Tanzania*. Folia Geographica Danica, Tom. XIV. Uppsala: C. A. Reizels Forlag.
- Tibazarwa, C. M. 1994. *Economic Revolutions in Bahaya History*. Devon: Merlin Books LTD.